

atrial shapes. 第 81 回日本循環器学会学術集会. 金沢, 3月.

IV. 著 書

- 1) 名越智古, 吉村道博. 外来のガイドライン診療－診断, 管理・治療－【循環器疾患】 9. 高血圧. 泉孝英 (京都大) 編集主幹. ガイドライン外来診療 2017: 今日の診療のために. 東京: 日経メディカル開発, 2017. p.86-96.

V. その他

- 1) 鳴井亮介, 徳田道史, 徳竹賢一, 横山賢一, 日置美香, 谷川真一, 山下省吾, 稲田慶一, 松尾征一郎, 吉村道博, 山根禎一. 房室結節リエントリー性頻拍と接合部頻拍を鑑別する目的で行われたプログラム刺激にて矛盾する所見が得られた上室性頻拍の 1 例. 臨心臓電気生理 2016; 39: 67-72.
- 2) 吉井 顕, 吉野拓哉, 松坂 憲, 森本 智, 田中寿一, 小川和男, 名越智古, 南井孝介, 宮本敬史, 武藤誠, 吉村道博. 低左心機能が遷延した褐色細胞腫の 1 例. 心臓 2016; 48(7): 757-63.
- 3) 宮永 哲, 大井悠平, 姜 鍊偲, 吉田 純, 山田崇之, 鈴木健一朗, 小菅玄晴, 中田耕太郎, 石川哲也, 竹田 康, 小武海公明, 山根禎一, 吉村道博. 心室中隔欠損症の血流 jet が影響したと考えられた右室流出路起源心室頻拍の 1 例. 心臓 2016; 48(Suppl.2): 148-51.

糖尿病・代謝・内分泌内科

教授: 宇都宮一典	糖尿病・代謝・内分泌内科
教授: 東條 克能	糖尿病・代謝・内分泌内科
教授: 横田 邦信	糖尿病・代謝・内分泌内科
教授: 森 豊	糖尿病・代謝・内分泌内科
教授: 根本 昌実	糖尿病・代謝・内分泌内科
准教授: 横田 太持	糖尿病・代謝・内分泌内科
准教授: 西村 理明	糖尿病・代謝・内分泌内科
准教授: 藤本 啓	糖尿病・代謝・内分泌内科
講師: 加藤 秀一	糖尿病・代謝・内分泌内科
講師: 佐野 浩斎	糖尿病・代謝・内分泌内科
<small>(津南病院に outward)</small>	
講師: 坂本 昌也	糖尿病・代謝・内分泌内科
講師: 川浪 大治	糖尿病・代謝・内分泌内科
講師: 石澤 将	糖尿病・代謝・内分泌内科
<small>(富士市立中央病院に outward)</small>	

教育・研究概要

糖尿病・代謝・内分泌内科では、糖尿病（1 型、2 型）を中心とした代謝性疾患、および甲状腺、下垂体、副腎、性腺などの内分泌疾患を対象とした幅広い診療を行っており、継続的に診療している外来患者数は 4 附属病院で 1.6 万人を数え、年々増加している。このような患者数の増加を背景として、糖尿病・代謝・内分泌内科では、糖尿病学および内分泌学の進歩に寄与するのみならず、患者さんに対して最善最良の医療を提供するために、臨床に還元することが出来る質の高い基礎的・臨床的研究を行っている。また学生教育においては当学学生のみならず、国内外から広く受け入れている。卒後研修医・レジデントに対しても積極的な学会発表を指導している。

I. 糖尿病合併症に関する研究

1. 糖尿病細小血管症と Rho/Rho-kinase シグナル: 低分子量 G 蛋白 Rho の標的分子である Rho-kinase は糖尿病状態で活性化され、血管合併症の病態形成に深く関与している。本来 Rho/Rho-kinase シグナルはアクチンストレスファイバーの脱重合やミオシン軽鎖のリン酸化による細胞形態・伸縮性の調節をはじめ、様々な細胞機能を制御している。しかし、糖尿病状態の網膜においては血管新生因子の発現を誘導し、腎臓では酸化ストレスの亢進や炎症性サイトカインの発現、低酸素応答を介した糸球体硬化、尿細管上皮細胞の形質転換を制御することが明らかになっている。さらに、末梢神経における

Rho/Rho-kinase の過剰な活性化は、接着関連分子の局在を介した神経障害の進展に関与することが明らかになっている。

2. 糖尿病大血管症と Rho/Rho-kinase シグナル

Rho-kinase は血管内皮での接着分子発現や炎症性サイトカインの発現をも制御しており、大血管症の進展過程においても重要な役割を担うと考えられる。これまでの検討結果から、糖尿病による血管合併症は臓器毎に進展するものではなく、Rho-kinase の活性化を主体とした共通の病態が存在すると考えている。これは同時に Rho-kinase が有効な治療標的となる事を強く示唆するものであり、臨床に対する還元を強く意識して研究を進めている。

II. 疫学に関する研究

1. 持続血糖モニターを用いた糖尿病の病態把握・臨床研究

1型糖尿病ならびに2型糖尿病患者における血糖変動パターンを評価し論文化してきた。薬物を用いた臨床研究や、低血糖の予測因子にも取り組んでいる。今後、Flash Monitoring Glucose を用いた臨床研究にも取り組んでいる。

2. 地域住民の生活習慣病ならびにインスリン抵抗性に関する研究

新潟県津南町（豪雪で有名かつ新潟県屈指の長寿町）において、住民健診のデータを解析して生活習慣病の特徴を明らかにしようとする試みである。また、中学生を対象に空腹時採血を行うことにより、インスリン抵抗性・インスリン分泌能や脂肪酸分画の詳細について検討している。

3. 病院データベースについての検討

4 附属病院外来に通院中のデータベースを作成中である。外来患者の血糖コントロールの状況、処方状況ならびにこれらの動向を評価し、我が国屈指のデータベースとして活用できるように検討して行く。

III. 膵ランゲルハンス島の分子生物学的研究

糖尿病発症時はインスリン分泌能（膵β細胞機能）が約半分は減弱しており、インスリン分泌能は時間経過とともに低下する。近年インスリン分泌能低下は膵β細胞容積減少が糖尿病の発症と悪化の原因として知られてきた。そこで、膵細胞減少の分子生物学的機序の解明を目的とした研究を行っている。

1. 糖脂毒性による PKCδ 依存性膵β細胞容積変化の分子機序の解明

高血糖による膵β細胞生涯は糖毒性以外の要素が

関連していることが示唆されている。糖尿病に合併する事が多い高脂血症による「脂肪毒性」である。さらに、糖毒性と脂肪毒性が合併した「糖脂毒性」により膵β細胞死がさらに増悪することが予想される。このことから、高脂肪食が多い現代糖尿病患者の食生活において、膵β細胞容積低下がより増悪する要因として、糖脂毒性の関与が考えられる。

細胞死や細胞増殖に関与するプロテインキナーゼ C のアイソフォームのひとつである PKCδ は、活性化にジアセルグリセロールを必要とする。ジアセルグリセロールは脂質の代謝産物のため、高脂肪食では PKCδ が活性化される。そこで、当研究室では PKCδ に注目し、「糖脂毒性における PKCδ を介した膵β細胞死の分子生物学的機序の解明」を目指している。共同研究先であるアメリカのワシントン大学より分与され、日本では我々のみが保有している PKCδ flox マウスを用いた研究も併せて行っている。Cre/loxP システムを用いて PKCδ を膵β細胞特異的にノックアウトしたマウスを樹立し、糖尿病のモデルマウスにおける耐糖能や膵β細胞死の変化を検討している。

IV. 内分泌に関する研究

近年、内分泌疾患の臨床は、古典的なホルモン産生腫瘍に関する診療だけにとどまらず、生活習慣病の臨床との結びつきが強まっている。特に、アルドステロンやレプチンに関しては、具体的な生活習慣病との結びつきが解明されつつあり、単にホルモンの過剰・低下に対する治療だけでなく、生活習慣病の診療を行う上で、内分泌学的な視点を持つ事が大切である。

1. 基礎研究

- 1) 糖尿病腎症におけるミネラルコルチコイド受容体の作用に関する研究
- 2) 糖尿病黄斑浮腫におけるミネラルコルチコイド受容体の作用に関する研究

2. 臨床研究

- 1) 内分泌疾患患者のデータベース
- 2) 副腎腫瘍（無機能腺腫・原発性アルドステロン症）に関する臨床研究
- 3) 稀少症例に関する症例報告
- 4) GH 分泌不全症の臨床像に関する研究

V. 高血圧に関する研究

糖尿病、高血圧症、脂質異常症の存在は心血管イベントリスクであり、これらの合併が心血管リスクを増大することも知られている。治療は血糖値、血

圧値、コレステロール、中性脂肪値を低下させることであるが、近年これらのパラメータの「変動」が心血管イベントの発症や糖尿病合併症の増悪を引き起こす事が報告されてきており、これらのパラメータの「変動」に注目し、これらの発生や心血管イベントに結びつく機序の解明に取り組んでいる。具体的な研究テーマを以下に示す。

1. 糖尿病性心筋症と 12-LOX
2. 血糖変動と血圧変動の共通メカニズムとしての圧・化学受容体の制御機構
3. グルコースモニタリングによる血糖変動のマーカーとしての役割
4. 血糖変動、血圧変動、脂質変動に関わる因子の解明
5. 血糖変動に各糖尿病薬が与える影響
6. 自宅モニタリングシステム開発

【点検・評価】

1. 長所

糖尿病・代謝・内分泌内科では、糖尿病を中心とした代謝性疾患、および甲状腺、下垂体、副腎、性腺などの内分泌疾患を対象とした幅広い診療を行っており、継続的に診療している外来患者数は4附属病院で1.6万人を数え、年々増加している。特に2015年度はこれまでの最高患者数を記録し、他施設からの紹介患者も急激に増加していることから、糖尿病・内分泌領域において日本国内随一の臨床・研究施設となった。これまで、糖尿病・代謝・内分泌内科では、糖尿病学および内分泌学の進歩に寄与するのみならず、患者さんに対して最善最良の医療を提供するために、臨床に還元することが出来る質の高い基礎的・臨床的研究を行ってきた。近年の上記のような症例数の急激な増加を背景に、これまで以上に質の高い基礎的・臨床的研究が可能となり、これに伴い質の高い論文発表や学会発表が可能となっている。

2. 問題点

上記の通り、患者数が顕著に増加していることを背景に、医局員が臨床・研究・教育の全ての領域において、均等な時間配分をすることが困難になりつつある。医局員への調査によれば、特に若い医局員において研究・教育に費やす時間が減少し、特に研究に費やす時間を捻出することが出来ず、研究を開始する時期が遅くなるという現状がある。また上級医に関しては、今日の情報の発展や外来指導の充実から病棟業務から外来業務へと診療の重点が移行しており、負担が多くなっていることである。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Katoh S, Markku Peltonen, Zeniya M, Kaji M, Sakamoto Y, Utsunomiya K, Tuomilehto J. Analysis of the Japanese Diabetes Risk Score and fatty liver markers for incident diabetes in a Japanese cohort. *Prim Care Diabetes* 2016; 10(1): 19-26.
- 2) Nishimura R, Izumi K, Hayashino Y, Origasa H, Noda M, Ueki K, Tajima N. A large-scale observational study to investigate the current status of diabetes complications and their prevention in Japan: research outline and baseline data for type 1 diabetes JDCP study 2. *Diabetol Int* 2016; 7(1): 4-11.
- 3) Nishimura R, Omiya H, Sugio K, Ubukata M, Sakai S, Samukawa Y. Sodium-glucose cotransporter 2 inhibitor luseogliflozin improves glycaemic control, assessed by continuous glucose monitoring, even on a low-carbohydrate diet. *Diabetes Obes Metab* 2016; 18(7): 702-6.
- 4) Kano M, Takekoshi S, Osamura R, Tojo K, Utsunomiya K, Yamada S. Characterization of possible tumor stem cells from human pituitary adenomas. *Jikeikai Med J* 2016; 63(1): 15-25.
- 5) Onda Y, Nishimura R, Morimoto A, Sano H, Utsunomiya K, Tajima N; Diabetes Epidemiology Research International (DERI) Mortality Study Group. Age at transition from pediatric to adult care has no relationship with mortality for childhood-onset type 1 diabetes in Japan: Diabetes Epidemiology Research International (DERI) Mortality Study. *PLoS One* 2016; 11(3): e0150720.
- 6) Iuchi H, Sakamoto M, Suzuki H, Kayama Y, Ohashi K, Hayashi T, Ishizawa S, Yokota T, Tojo K, Yoshimura M, Utsunomiya K. Effect of one-week salt restriction on blood pressure variability in hypertensive patients with type 2 diabetes. *PLoS One* 2016; 11(1): e0144921.
- 7) Ohashi K, Hayashi T, Sakamoto M, Iuchi H, Suzuki H, Ebisawa T, Tojo K, Sasano H, Utsunomiya K. Aldosterone-producing adrenocortical carcinoma with prominent hepatic metastasis diagnosed by liver biopsy: a case report. *BMC Endocr Disord* 2016; 16: 3.
- 8) Yusuke T, Daiji K, Utsunomiya K. Detection of hemoglobin variant HbS on the basis of discrepant HbA1c values in different measurement methods. *Diabetol Int* 2016; 7(2): 199-203.
- 9) Ochiai H, Shirasawa T, Nanri H, Nishimura R, Matoba M, Hoshino H, Kokaze A. Eating quickly is associated with waist-to-height ratio among Japanese ad-

- olescents : a cross-sectional survey. Arch Public Health 2016 ; 74 : 18.
- 10) Samukawa Y, Omiya H, Watase H, Nozaki K, Sakai S, Nishimura R. Substantial effects of luseogliflozin revealed by analyzing responses to postprandial hyperglycemia : post hoc subanalyses of a randomized controlled study. Adv Ther 2016 ; 33(7) : 1215-30.
- 11) Sone H, Nakagami T, Nishimura R, Tajima N ; MEGA Study Group. Comparison of lipid parameters to predict cardiovascular events in Japanese mild-to-moderate hypercholesterolemic patients with and without type 2 diabetes : subanalysis of the MEGA Study. Diabetes Res Clin Pract 2016 ; 113 : 14-22.
- 12) Haneda M, Seino Y, Inagaki N, Kaku K, Sasaki T, Fukatsu A, Kakiuchi H, Sato Y, Sakai S, Samukawa Y. Influence of renal function on the 52-week efficacy and safety of the sodium glucose cotransporter 2 inhibitor luseogliflozin in Japanese patients with type 2 diabetes mellitus. Clin Ther 2016 ; 38(1) : 66-88.
- 13) Kawanami D, Matoba K, Sango K, Utsunomiya K. Incretin-based therapies for diabetic complications : basic mechanisms and clinical evidence. Int J Mol Sci 2016. 17(8) : E1223.
- 14) Kawanami D, Matoba K, Utsunomiya K. Signaling pathways in diabetic nephropathy. Histol Histopathol 2016 ; 31 (10) : 1059-67.
- 15) Onda Y, Nishimura R, Ando K, Takahashi H, Tsujino D, Utsunomiya K. Comparison of glycemic variability in Japanese patients with type 1 diabetes receiving insulin degludec versus insulin glargine using continuous glucose monitoring : a randomized, crossover, pilot study. Diabetes Res Clin Pract 2016 ; 120 : 149-155.
- 16) Onda Y, Sugihara S, Ogata T, Yokoya S, Yokoyama T, Tajima N ; Type 1 Diabetes (T1D) Study Group. Incidence and prevalence of childhood-onset Type 1 diabetes in Japan : the T1D study. Diabet Med 2017 ; 34(7) : 909-15. Epub 2017 Feb 2.
- 17) Takahashi H, Nishimura R, Onda Y, Ando K, Tsujino D, Utsunomiya K. Comparison of glycemic variability in Japanese patients with type 1 diabetes receiving insulin degludec versus insulin detemir using continuous glucose monitoring : a randomized, crossover, pilot study. Expert Opin Pharmacother 2017 ; 18(4) : 335-42.
- 18) Suzuki R, Hayashi T, Asano H, Ohashi K, Sakamoto M, Tojo K, Utsunomiya K. Prolonged QT intervals in isolated ACTH deficiency : case report and mini review of literature. J Steroids Horm Sci 2016 ; 7(2) : 1000176.
- 19) 小林久美, 大和 梓, 林 毅, 松谷大輔, 井手華子, 金澤 康, 坂本昌也, 東條克能, 宇都宮一典. 出産後に急激に顕在化した, コントロール不良の糖尿病を来した ACTH 産生胸腺カルチノイドによる異所性 Cushing 症候群の一例. ACTH RELATED PEPTIDES 2016 ; 27 : 56-7.
- 20) 鈴木里佳子, 林 毅, 浅野 裕, 大村有加, 廣津貴夫, 安藤精貴, 坂本敬子, 坂本昌也, 藤本 啓, 東條克能, 宇都宮一典. 食後低血糖症状を呈した続発性副腎皮質機能低下症の一例. ACTH RELATED PEPTIDES 2016 ; 27 : 62-3.
- 21) 大和 梓, 林 毅, 小口愛子, 藤原久美, 原興一郎, 森 良介, 山城健二, 川浪大治, 木村章嗣, 坂本太郎, 赤崎安晴, 東條克能, 宇都宮一典. 両側褐色細胞腫と膝内分泌腫瘍を呈した VHL 病の一例. ACTH RELATED PEPTIDES 2016 ; 27 : 72-4.
- 22) Bando H¹⁾, Iguchi G¹⁾, Okimura Y (Kobe Women's Univ), Otake Y¹⁾, Yoshida K¹⁾, Matsumoto R¹⁾, Suda K¹⁾, Nishizawa H¹⁾, Fukuoka H¹⁾, Mokubo A (Mokubo Clin), Tojo K, Maniwa Y¹⁾, Ogawa W¹⁾, Takahashi Y¹⁾ (¹Kobe Univ). A novel thymoma-associated autoimmune disease : anti-PIT-1 antibody syndrome. Sci Rep 2017 ; 7 : 43060.

II. 総 説

- 1) 川浪大治. 【Combination therapy による最新糖尿病治療戦略】 海外のガイドラインから見た initial combination therapy のあり方. 糖尿病の最新治療 2016 ; 8(1) : 8-12.
- 2) 竹田裕介, 川浪大治, 宇都宮一典. 第三章 : 腎症 2 ~ 4 期 : 透析導入療法導入までの治療のポイント 1. 総論. 稲葉雅章¹⁾ 監修, 絵本正憲¹⁾, 森 克仁¹⁾ (¹大阪市立大) 編. 糖尿病腎症治療のポイント : 早期腎症から透析療法まで. 大阪 : 医薬ジャーナル社, 2016. p.80-6.
- 3) 原興一郎, 川浪大治, 宇都宮一典. 【DPP-4 阻害薬を極める ~ 有効性と安全性を踏まえた適正使用に向けて ~】 DPP-4 阻害薬の安全性について. 月刊糖尿病 2016 ; 8(12) : 102-9.
- 4) 大村有加, 川浪大治, 宇都宮一典. Basic & Clinical Topics [臨床①] 低脂肪食が長期的に体重変化に与える効果 : システマティックレビューとメタ解析. Diabetes Update 2016 ; 5(3) : 136-7.
- 5) Ikeda K, Tojo K, Manome Y. Expression and potent actions of urocortins and related peptides in cancer therapy. Intern Med Rev (Wash D C) 2016 ; 2(9).
- 6) 川浪大治, 宇都宮一典. 【糖尿病治療における食事療法の課題と展望 - 新たなエビデンスに基づいた食事

療法】アルコール、カレントセラピー 2016；34(6)：554-8.

- 7) 高橋 紘. 【進化する糖尿病治療！～話題の新薬と治療法～】注射製剤 SAP 療法の登場は血糖コントロール改善に寄与したか？ 月刊糖尿病 2016；8(10)：73-81.
- 8) 三石純江, 西村理明. 【迫りくる低血糖～糖尿病治療に伴う低血糖の危険性～】低血糖を防ぐ SMBG と CGM の有用性. 月刊糖尿病 2016；8(9)：56-62.
- 9) 東條克能. 【高尿酸血症・低尿酸血症－最近の診断と治療－】高尿酸血症の臨床 高尿酸血症の病理・病態 二次性高尿酸血症（産生過剰型・排泄低下型・混合型）内分泌疾患における高尿酸血症. 日臨 2016；74(増刊9 高尿酸血症・低尿酸血症)：131-5.

III. 学会発表

- 1) 川浪大治, 的場圭一郎, 竹田裕介, 永井洋介, 石澤将, 金澤 康, 横田太持, 宇都宮一典. (ワークショップ 23：腎症-1) Rho-kinase によるポドサイト調節機構と糖尿病腎症への関与. 第 31 回日本糖尿病合併症学会. 仙台, 10 月.
- 2) 川浪大治, 的場圭一郎, 三五一憲 (東京都医学総合研究所), 宇都宮一典. (シンポジウム：糖尿病性腎症の病態研究における新たな展開) 糖尿病性腎症における Rho-kinase の役割. 第 28 回日本糖尿病性腎症研究会. 東京, 12 月.
- 3) 安藤精貴, 西村理明, 瀬尾千顕, 須藤英訓, 澤野祥子, 三石純江, 高橋 紘, 辻野大助, 宇都宮一典. 2 型糖尿病患者における DPP-4 阻害薬内服時と速効型インスリン分泌促進薬内服時の血糖変動を予測する血糖測定ポイントの検討. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 4) 永井洋介, 川浪大治, 的場圭一郎, 竹田裕介, 石澤将, 金澤 康, 横田太持, 宇都宮一典. Rho-kinase はメサンギウム細胞において CTGF の発現を制御する. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 5) 永峯翔太, 好川有希子, 范 揚文, 伊藤洋太, 小林久晃, 吉野明博, 成宮 学, 宇都宮一典. CSII, CGM により血糖管理を行ったが, 産褥期に子癇の前駆症状を呈した妊娠合併 1 型糖尿病の 1 症例. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 6) 塩崎正嗣, 藤本 啓, 佐々木敬, 宇都宮一典. 膵 α 細胞における PKC δ 依存性グルカゴン分泌機序の解明. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 7) 恩田美湖, 杉原茂孝, 緒方 勤, 横谷 進, 横山徹爾, 田嶋尚子. 我が国における 15 歳以下発症 1 型糖尿病の発症率および有病率：T1D Study. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 8) Katoh S, Zeniya M, Kaji M, Sakamoto Y, Utsunomiya K. NAFLD deteriorated fasting insulin, urinary albumin excretion, cystatin C and high-sensitivity C-reactive protein independent of glycemic markers. 52nd Annual Meeting of the European Association for the Study of Diabetes (EASD 2016). Munich, Sept.
- 9) 原興一郎, 坂本昌也, 松谷大輔, 大和 梓, 井内裕之, 大橋謙之亮, 林 毅, 山城健二, 宇都宮一典. SGLT2 阻害薬 (ルセオグリフロジン) のインスリン投与有無での血糖低下作用に関する比較検討. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 10) 高橋 紘, 澤野祥子, 森 豊, 宇都宮一典. 高度な肥満を有する 2 型糖尿病に SGLT2 阻害薬と GLP-1 受容体作動薬の併用療法は効果的な治療法か. 第 37 回日本肥満学会. 東京, 10 月.
- 11) 高橋 紘, 西村理明, 須藤英訓, 澤野祥子, 三石純江, 辻野大助, 安藤精貴, 宇都宮一典. インスリンデグレデク投与中の 1 型糖尿病患者における夜間無自覚低血糖に関する予測指標の検討. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 12) 三石純江, 西村理明, 瀬尾千顕, 須藤英訓, 澤野祥子, 高橋 紘, 辻野大助, 安藤精貴, 宇都宮一典. 2 型糖尿病患者における DPP-4 阻害薬内服時と α -グルコシダーゼ阻害薬内服時の血糖変動を予測する血糖測定ポイントの検討. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 13) Sudo E, Nishimura R, Mitsuishi S, Tsujino D, Ando K, Utsunomiya K. Is the presence or absence of nocturnal hypoglycemia unawareness related to changes in parameters for 24-hour glycemic variability in type 1 diabetic patients? 52nd Annual Meeting of the European Association for the Study of Diabetes (EASD 2016). Munich, Sept.
- 14) 須藤英訓, 三石純江, 西村理明, 辻野大助, 安藤精貴, 宇都宮一典. 1 型糖尿病患者の夜間無自覚低血糖の有無と, 24 時間血糖変動の標準偏差 (SD) や MAGE との関係. 第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5 月.
- 15) 大和 梓, 河野貴史, 永野秀和, 石渡規生, 堀口健太郎, 井下尚子, 山田正三, 田中知明, 横手幸太郎. 腫瘍体細胞変異パターンから捉えた先端巨大症 163 例の臨床的特徴. 第 26 回臨床内分泌代謝 update. さいたま, 11 月.
- 16) 大和 梓, 河野貴史, 永野秀和, 石渡規生, 堀口健太郎, 井下尚子, 山田正三, 田中知明, 横手幸太郎. AIP 変異アクロメガリー 4 症例の特徴. 第 27 回日本間脳下垂体腫瘍学会. 東京, 2 月.
- 17) 山城健二, 瀬尾千顕, 嘉納麻耶, 浅野 裕, 南雲左江, 坂本敬子, 東條克能, 宇都宮一典. 画像で特定出

来ず選択的動脈刺激静脈サンプリングが有効であったインスリノーマの1例. 第59回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5月.

- 18) 林 毅, 松浦祐香, 徳久照朗, 藤原久美, 小口愛子, 浅野 裕, 大和 梓, 山城健二, 平井利明, 坂本昌也, 東條克能, 宇都宮一典. HPV ワクチン接種後に慢性疲労を主症状とし, 視床下部障害が疑われた症例に対する内分泌学的検討. 第89回日本内分泌学会学術総会. 京都, 4月.
- 19) 大村有加, 藤本 啓, 廣津貴夫, 浅野 裕, 坂本敬子, 東條克能, 宇都宮一典. インスリノーマにおけるインタクト・プロインスリンと選択的動脈内刺激薬注入 (SACI) 試験の有効性に関する検討. 第59回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5月.
- 20) Sawano S, Nishimura R, Takahashi H, Sudo H, Mitsuishi S, Tsujino D, Ando K, Utsunomiya K. Exploring ideal time points for predicting glucose fluctuations in type 1 diabetics receiving insulin degludec: a continuous glucose monitoring study. 52nd Annual Meeting of the European Association for the Study of Diabetes (EASD 2016). Munich, Sept.

IV. 著 書

- 1) 東條克能. 14. 内分泌の疾患 14-2. 視床下部・下垂体
1) 発生・形態, 2) 視床下部・下垂体連関, 3) 下垂体前葉ホルモン. 内科学. 第11版. 矢崎義雄 (国際医療福祉大) 総編集. 東京: 朝倉書店, 2017. p.1523-9.

V. その他

- 1) Tsutsui K, Nemoto M. A case of beriberi with leg edema, pleural effusion, and anemia. Ann Clin Case Rep 2016; 1: 1067.
- 2) Tsutsui K, Nemoto M. A case report of fibromyalgia. Ann Clin Case Rep 2016; 1: 1176.
- 3) 森武美帆, 川浪大治, 山城健二, 須藤英訓, 嘉納麻耶, 三石純江, 原興一郎, 坂本昌也, 西村理明, 宇都宮一典. 卵管癌に対してニボルマブ投与後に劇症1型糖尿病を発症した1症例. 第54回日本糖尿病学会関東甲信越地方会. 横浜, 1月.
- 4) 浅野 裕. 日光暴露の不足によって低カルシウム血症を呈した男性の1例. 日本内科学会第624回関東地方会. 東京, 6月.
- 5) 鈴木里佳子, 高橋 紘, 好川有希子, 鈴木博史, 森豊, 宇都宮一典. リラグルチドにミチグリニド/ボグリボース配合剤を追加投与した際の血糖日内変動. 第54回日本糖尿病学会関東甲信越地方会. 横浜, 1月.

腫瘍・血液内科

教授: 相羽 恵介	臨床腫瘍学, がん薬物療法
教授: 薄井 紀子	血液腫瘍学, がん薬物療法
准教授: 島田 貴	血液内科学
准教授: 土橋 信明	血液腫瘍学, がん薬物療法
准教授: 矢野 真吾	血液内科学
講師: 増岡 秀一	血液内科学
講師: 西脇 嘉一	血液腫瘍学, 造血幹細胞移植学
講師: 矢萩 裕一	血液腫瘍学
講師: 小笠原洋治	血液内科学
講師: 杉山 勝紀	血液腫瘍学
講師: 齋藤 健	血液腫瘍学, 造血幹細胞移植学
講師: 塩田 祐子	血液腫瘍学, がん薬物療法
講師: 南 次郎	血液腫瘍学, 造血幹細胞移植学
講師: 荒川 泰弘	臨床腫瘍学, がん薬物療法
講師: 大場 理恵	血液腫瘍学, 造血幹細胞移植学

教育・研究概要

腫瘍・血液内科では, 良性血液疾患, 造血器悪性腫瘍, 固形がんを三つの柱として幅広い診療を行っている。悪性腫瘍の制圧は私たちに課された最優先課題の一つであり, 造血器悪性腫瘍に対する化学療法と造血幹細胞移植療法, 固形がんに対する集学的治療に力を注いでいる。そのため, エビデンスに基づいた標準治療から最新の治療まで, 患者さんの病態に応じた最適な医療を提供できるように努めている。そのため質の高い全国規模の臨床研究に特に力を入れている。学生教育においては臨床実習での教育を重視しており, 実際のベッドサイドで患者さんから医学を学ぶよう配慮している。卒後研修医・レジデントに対しては, 医局会や学会で症例報告の機会を与え, プレゼンテーション能力の育成に努めている。

I. 急性白血病の臨床研究

日本成人白血病治療共同研究グループ (Japan Adult Leukemia Study Group: JALSG) に参加し, 多施設共同で質の高い臨床研究を行っている。特に急性骨髄性白血病 (AML) の症例登録数は全国で3番と, 当科での臨床の activity の高さを示している。